

2024年度

近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会

2025年1月12日・13日

近畿ESDコンソーシアム・奈良教育大学ESD・SDGsセンター



ESD・SDGs
センター

連携教育
開発センター

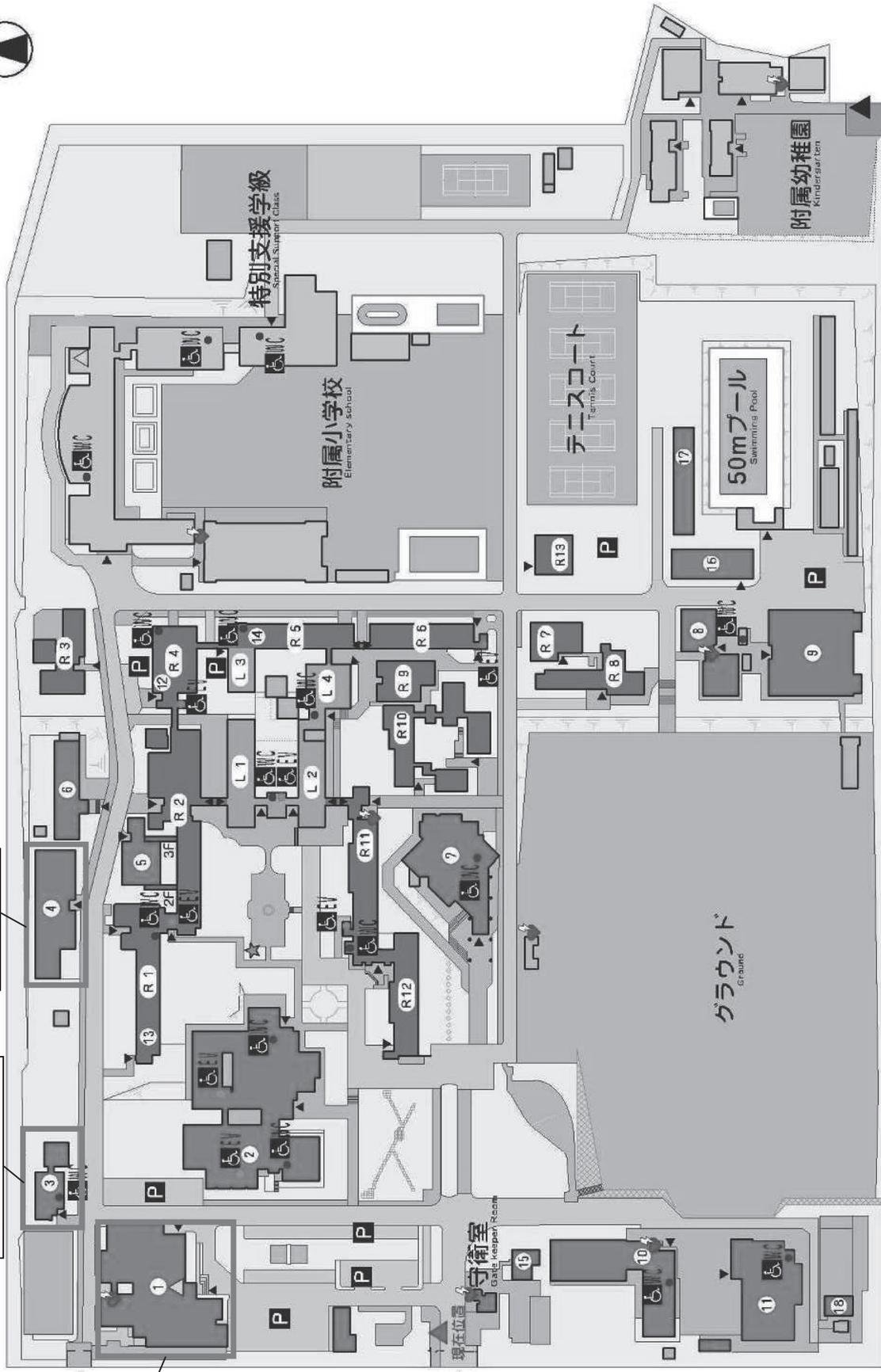
高畑町
バス停○

通用門

管理棟

正門

守衛室
Gate (reception Room)



附属幼稚園
正門

附属幼稚園
Kindergarten

テニスコート
Tennis Court

50mプール
Swimming Pool

グラウンド
Ground

特別支援学級
Special Support Class

附属小学校
Elementary School

高畑町
バス停○

通用門

管理棟

正門

守衛室
Gate (reception Room)

附属幼稚園
正門

附属幼稚園
Kindergarten

テニスコート
Tennis Court

50mプール
Swimming Pool

グラウンド
Ground

特別支援学級
Special Support Class

附属小学校
Elementary School

ごあいさつ



2024年度の「近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会」を開催できますこと、心より嬉しく思います。ここに集う児童・生徒の皆さん、保護者の方々、先生方、そして会を支えてくださるすべての皆様のご尽力に対し、主催者を代表して厚く御礼申し上げます。また、同一法人として奈良教育大学と奈良女子大学を束ねる奈良国立大学機構の榊裕之理事長には、「学び、究め、創り出す力を育むー持続可能な世界を築くためにー」と題したご講演をいただけることになりました。感謝申し上げます。

昨年から年始に実施することとなったこの会。新年の挨拶を交わすとともに、「今年もまた皆でESDを推進していこう」と決意を新たにするにふさわしいものになりました。皆様、あらためて今年もよろしくお願いいたします。

ところで、昨年秋、私はとうとう秋物のコートを一度も羽織ることなくダウンコートに切り替えました。金木犀の香りもその濃度が薄れ、一瞬で消えてしまったことを感じました。日本の秋はどこへ行ってしまったのでしょうか。「季節のうつろい」という言葉も、私の好きなユーミンの《晩夏》やトワ・エ・モアの《誰もいない海》も、だんだん忘れられていってしまうのでしょうか。気候変動を本当に身近に実感した秋でした。気候・環境・自然等の破壊に伴って、文化・芸術・風土の持続可能性は大丈夫なのかと、その中に生きる人間の心の持続可能性は大丈夫なのかと、切実に不安が増してきます。

そんな憂いを嘆きながら、では私自身何を実行しているのかと問うと、今度は恥ずかしさが押し寄せてきます。「ESDは行動の変容だ」と声高に叫んでいるだけではないのか。1年に1度のこの会で、子どもフォーラムから得た感動を私自身の行動を変容させるための努力に繋げているのかどうか。近畿ESDコンソーシアムの会長である前に一市民として…。

2023年は、G7教育大臣会合「富山・金沢宣言」、第4期教育振興基本計画（令和5年度～9年度）、ユネスコ教育勧告（「平和、人権、国際理解、協力、基本的自由、グローバル・シチズンシップ及び持続可能な開発のための教育に関する勧告」）が次々と出されました。それから1年以上たった今、宣言や原則や勧告をどのように受けとめ、教育現場等でどのように実践されてきたか、この会で確認しあい、さらなる推進が加速することを期待します。

近畿ESDコンソーシアムは、我が国の他のコンソーシアムのみならず、世界のESDを牽引していくことのできる組織であると思っています。今日の発表や実践交流の輪が、引き続き近畿から全国へ、そして世界へと広がっていくことを願ってやみません。そして、本当に、誰一人取り残すことのない社会の実現に向け、皆で力を合わせ、ESDを着実に進めていきましょう。私も頑張ります。

2025年1月12日

奈良教育大学 学長
近畿ESDコンソーシアム 会長
宮下 俊也

2024年度 近畿ESDコンソーシアム成果発表会・実践交流会開催要項

1. 目的

学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」を育成することが明記されたことより、全国の幼稚園、小中学校、高等学校で ESD の理念に基づく教育活動が展開されつつある。また、持続可能な開発目標 (SDGs) への関心が企業や NPO などの生涯教育において高まってきており、学校教育・生涯教育および企業等においても、質の高い教育活動が求められることから、構成団体メンバーの意欲向上と活動の質的向上、また ESD の普及を目的に開催する。

2. 主催 近畿 ESD コンソーシアム、奈良教育大学 ESD・SDGs センター

3. 後援 ESD 活動支援センター、近畿地方 ESD 活動支援センター、ASPUniv.Net

4. 開催日時 2025年1月12日(日)9時50分～17時10分
1月13日(月)9時30分～12時

5. 会場 奈良教育大学本部大会議室、ESD・SDGs センター多目的ホール、
連携教育開発センター大会議室

6. 日程

【1月12日(日)】

9:30-9:50 受付(奈良教育大学本部)

9:50-10:00 開会行事:大会議室 司会:阪本さゆり氏(ESD・SDGs センター研究部員)
挨拶:宮下俊也(近畿 ESD コンソーシアム会長・奈良教育大学学長)

10:00-12:20 ESD 子どもフォーラム(発表20分+意見交流・移動10分)
進行:奈良教育大学ユネスコクラブ 苗代昇妥・木幡美幸・下田愛結
① 福岡市立小呂小学校・小呂中学校
② 草津市立老上中学校
③ 白浜町立白浜中学校
④ 天理市立福住中学校
講評: 宮下俊也(近畿 ESD コンソーシアム会長)
西口美佐子氏(近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員)

12:20-13:30 昼食休憩

13:30-15:30 ESD 実践交流会 I (発表20分+質疑10分)

第1分科会:大会議室

司会:草津市教育委員会学校教育課係長 中村大輔氏

① 和歌山:すさみ町立周参見中学校 谷口祐也氏

② 愛媛:新居浜市教育委員会 星加大輔氏

③ 滋賀:草津市立松原中学校 山本寛之氏

④ 秋田:大仙市立大曲南中学校 島田智氏

第2分科会：ESD・SDGs センター多目的ホール

司会： 檜原市教育委員会指導主事 葛本雅崇氏

- ① 熊本： 菊池市立隈府小学校 橋本歌織氏
- ② 和歌山： 白浜町立西富田小学校 大浦侑唄氏
- ③ 企業等： 公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会 宮川洋一氏
- ④ 福岡： 福岡市立小呂小学校・小呂中学校 力 恵利佳氏

第3分科会：連携教育開発センター大会議室

司会： 橋本市教育委員会主幹・主任指導主事 木下豪人氏

- ① 福岡： 福岡市立三宅小学校 橋本智美氏
- ② 滋賀： 草津市立玉川こども園 中川珠紀氏
- ③ 和歌山： 橋本市立高野口小学校 岡本崇史氏
- ④ 鹿児島： 屋久島町立小瀬田小学校 高橋百合香氏

15：45－17：00 ESD 講演会：大会議室

「学び、究め、創り出す力を育む ― 持続可能な世界を築くために」
国立大学法人奈良国立大学機構 理事長 榎 裕之

17：00－17：10 閉会行事：大会議室

講評：福井昌平氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）

【1月13日（月）】

9：10－9：30 受付（奈良教育大学本部）

9：30－11：30 ESD 実践交流会Ⅱ（発表20分＋質疑10分）

第4分科会：大会議室

司会： 奈良市教育委員会指導主事 三木恵介氏

- ① 愛媛： 松山市立日浦小学校 西河珠美氏
- ② 鹿児島： 鹿児島市立広木小学校 横山邦昭氏
- ③ 石川： 能登町立小木小学校 倉見倫代氏
- ④ 奈良： 生駒市立俵口小学校 中川純一氏

第5分科会：ESD・SDGs センター多目的ホール

司会： 前大牟田市教育長 安田昌則氏（ESD・SDGs センター研究部員）

- ① 千葉： 麗澤中学校・高等学校 瀧村尚也氏
- ② 和歌山： 白浜町立白浜中学校 平野俊氏
- ③ 奈良： 奈良教育大学附属中学校 堤 彦三郎氏
- ④ 奈良： 奈良教育大学ユネスコクラブ 吉岡優来

第6分科会：連携教育開発センター大会議室

司会： 草津市教育委員会 ESD アドバイザー 井阪尚司氏

- ① 大阪： 大阪市立新森小路小学校 三笠日向氏
- ② 寺社： 華嚴宗大本山東大寺 鷲尾隆元氏、平岡慎紹氏
- ③ 熊本： 菊池市立花房小学校 村上千砂子氏
- ④ NPO： ビーフォレストクラブ 吉川 浩氏

11：40－12：00 閉会行事

講評：福井昌平氏、西口美佐子氏（近畿 ESD コンソーシアム外部評価委員）
挨拶：中澤静男（奈良教育大学 ESD・SDGs センター長）

※全プログラムとも Zoom 配信あり。

【ESD 子どもフォーラム】 1月12日(日)10:00~12:20
福岡市立小呂小学校・小呂中学校



草津市立老上中学校

白浜町立白浜中学校



天理市立福住中学校

ふるさとの良さを実感し、魅力を発信していこう

—職場体験学習と「すさみ夢カンパニー」の活動を通して—

谷口 祐也（和歌山県：すさみ町立周参見中学校）

I はじめに

和歌山県西牟婁郡すさみ町にある本校は、町に1つの中学校であるため、将来を担っていく生徒に対する地域の期待は大きい。そのような特色から、総合的な学習の時間は「ふるさとを生きる」をテーマに、地域の方々とのつながりを大切にしたい取り組みを進めている。

例年、実施されている職場体験学習の取り組みを、ESDの視点である「多様性」、「有限性」、「責任性」を意識しながら、実践した。持続可能な町にしていくなためにふるさとの素晴らしさを再発見し、ふるさとを愛する心を育てていきたいと考えた。

II 実践の概要

(1) 事業所訪問

校区の事業所を訪問し、2日間の職場体験学習を実施した。事前に「働く」についての質問づくりを行い、職場体験に向けての課題意識を持たせた。生徒には、働く意義を考えること、ふるさとの良さを実感すること、地域への貢献を考えることを期待した。

(2) 「すさみ夢カンパニー」模擬会社経営

職場体験学習の経験を生かし、田辺市で開催される「弁慶まつり」に参加し、2年生が運営する「すさみ夢カンパニー」という会社の経営を行った。営業、販売促進、人事の3つの部署に分かれ、「すさみの特産物」を販売した。職場体験の訪問先である事業所と交渉し、販売物を決めた。さらにビジネスプランを作成し、当日までの準備、企画等を考えた。以上の活動を通して、働くことの意義や地域の魅力を再発見できるようにした。さらに、地域の方々やお客さんとの交流から、コミュニケーションスキルの向上も図りたいと考えた。



図1 すさみ夢カンパニー

III 考察（成果と課題）

・事業所訪問を通して、ふるさとの「自然、資源」の素晴らしさに気づいている生徒がいた。さらに、あまり知られていなかった「特産物」について知ることができ、地元への愛着や誇りを感じることができた。

・すさみ夢カンパニーの販売物の検討から、批判的思考力（昨年度は完売できたのに、今年はなぜ完売できなかったのか）や責任性（すさみ町を未来に引き継いでいく）を養うことができた。

・それぞれの活動で、ESDの視点、資質・能力の面を意識した授業の工夫をもう少しできたのではないかと考える。



図2 なぜ完売できなかったのかを討論

地域とのつながりを自分たちから —生徒会活動をとおして—

星加 大輔（愛媛県：新居浜市教育委員会）

I はじめに

本市は平成29年度に全小中学校がユネスコスクールとして認定され、市内全体でESDを推進している。中萩校区は一小一中である。小学校では、ESDのテーマを「『伝えよう！地域のよさを』～見つけようふるさと 広げよう思いやり」の基に地域学習を中心に行っている。また、中学校では、「『自立・共存・交流』～地域に学び、自己の生き方を考える～」を基に校区を越えて、市内全域の視点から旧別子銅山の登山や職場体験学習などを通して、自分たちの住んでいる中萩校区の良さを改めて考えている。年度当初の生徒総会では、生徒からコロナ禍で弱くなった地域との関係の再構築の要望が出た。

コロナ禍を経験してきた中学生が、将来を見つめながら、学校のリーダー、地域の一員としてどのような行動をとることができるかを考え、役割を果たす意義は大きい。また、地域課題について学校内外の大人と対話し、解決していくことは、今後、社会の困難な課題を自分事として捉え、協働しながら積極的に解決していこうとする姿勢にもつながると考えた。特に、生徒会が地域行事の企画・運営を経験することは主体性、自己有用感を育み、教育的効果も十分期待ができる。

II 実践の主な概要

- (1) 全校生徒アンケート
- (2) 生徒総会
- (3) 校内リーダー研修会で実施内容を検討、
- (4) 防災リーダーとして校区防災活動
- (5) 月1回土曜日開催「はぎっこテン」ボランティア活動
- (6) ウォークラリー企画・運営
- (7) 現生徒会の活動の振り返り

III 考察

生徒会役員発足時に、コロナ禍で2年間中学校生活を制限された令和5年度の生徒会役員が、生徒会テーマ「萩中新時代」を掲げ、地域とのつながりを取り戻しながら、生徒会が中心となり主体的にESDに取り組んだ。成果として、生徒会を中心に中学生と地域とのつながりを取り戻すことができた。また、学校生活のあらゆる場面で教師が生徒の主体的に活動できる場を与え、従来の教師が指導者ではなく伴走者となり、対話を重ねながらの活動のスパイラルは、学校教育目標である「思いやりの心をもち、主体的に生きようとする生徒の育成」の醸成にもつながった。

令和6年度は、地域の組織改編が行われ、昨年度同様の活動は一部できてはいないが、生徒が主体となり持続可能な取組があらゆる場面で行われている。

実現しよう！「世界湖沼デー」制定プロジェクト

—Through saving the animals on the Red List—

山本 寛之（滋賀県：草津市立松原中学校）

I はじめに

本校では、今年度「ESDを軸とした生徒の主体性と課題解決力の育成～地域との協働学習を通して新たな価値を創造する～」をテーマに、取り組んでおり、3年間系統かつ連続性のある学習を推進している。3年生は1年生の時からGRIT学習に取り組み、SDGsの知識を積み重ねて、2年生では、その知識を活用して地域の方々や企業、市役所などの多彩なステークホルダーと連携し、松原ファームの開墾から収穫までを行ってきた。そして、3年生の英語科と総合的な学習の時間の教科横断型の取組を実施した。英語科ではUnit3「Animals on the Red List」（東京書籍）という単元を通して、世界の絶滅の危機にある動物について知り、自分たちにできることを考えた。同時に自分たちの住む滋賀県が世界に誇る琵琶湖の自然環境を持続可能なものとするために、若い世代がこれからの琵琶湖について考えた。同時に琵琶湖をはじめとする世界の湖沼保全を通して世界各地におけるSDGsの達成に貢献できる態度を育成に取り組んだ。

II 授業の概要（全11時間）

- ・夏休みの課題としてthe Red Listにある動植物を調べる。
- ・新学期に調べてきた内容をクラス内で発表をする。
- ・教科書の内容を通して世界にいる絶滅の危機にある動物について学習する。
- ・「If we lose one species, it affects many other. What happens for human beings?」をテーマに4コマ漫画を作り、自分自身に何ができるか考える。
- ・滋賀県（琵琶湖）の現状とMLGsについて知る。
- ・琵琶湖保全再生課の方から「世界湖沼デー」制定に向け世界の取組を知る。
- ・持続可能な琵琶湖の実現に向けてプレゼンテーションの準備と発表をする。
- ・「世界湖沼デー」応援モニュメントの制作をする。
- ・インドネシアの中学生との交流をする。
- ・単元を通しての振り返りをする。



4 コマ漫画



インドネシアの中学生との交流

III 成果と課題

英語を使ってコミュニケーションを行う力の向上に繋がった。また、湖沼の未来を守り、後世に引き継ぐことへの動機づけになった。

一方で、インドネシアの中学生との交流を行ったが、湖沼の保全に対する多面的・総合的な考えに至らなかったと考える。今後、同じ課題を同世代のユースが考え、共有する中で地球市民の一人として行動を促していけるような取組にしていく必要があると感じた。

「ストーリー」と「ネットワーク」で紡ぐ ESD for SDGs

島田 智（秋田県：大仙市立大曲南中学校）

I はじめに

本校は、2009年に秋田県内の小・中学校唯一のユネスコスクールに認定され、ESDの視点を取り入れた教育活動を展開してきた。本校では、「持続可能な社会の創り手の育成」を最上位目標とし、その具現化のために「SDGsの達成に向けたESDの実践による『生きる力』の育成」を学校経営の重点に据えている。具体的な手段として、総合的な学習の時間をESD実践の核と位置付け、各教科等との連携を図り、教科等横断的なカリキュラムを実行している。カリキュラムの実行では、ホールスクール・アプローチとともに、「ストーリー」と「ネットワーク」を重視している。

II 実践の概要

(1) 食と住（1年生）

- ・給食由来の有機肥料を使った野菜栽培から、「食品ロス」という課題を見出し、探究的な学習を進める。
- ・「エコハウスを設計しよう」という課題の下、エネルギーの視点をもって、過去から現在、そして未来へのストーリーで学習を展開する。

(2) エネルギーと気候変動（2年生）

- ・1年生からのつながりで、エネルギーを主題としてストーリーを展開する。
- ・再生可能エネルギーや発電について学び、エネルギーと気候変動の関係を意識し、気候変動ミステリー授業で、気候変動と実際の出来事の関わりを自分事として捉える。
- ・まとめとして、エコハウスを発展させた「エコシティーを設計しよう」の授業を実施する。

(3) 国際理解とSDGs商品開発（3年生）

- ・気候変動の影響が最も顕著なキリバス共和国の中学生とオンライン交流を行い、地球温暖化防止について自分たちができることを考える。
- ・これまで3年間で学んだことを基に、SDGsを踏まえた商品を、国際教養大学の学生やキャリア教育コーディネーターの指導で考案し、作成し、販売する。

これらの取組は、ESDストーリーマップに位置付けられている。また、様々な人や企業、団体とのネットワークを活用して進められている。

III 成果と課題

本校では、ESDを「E：教育」と「SD：持続可能な開発」に分けて考えており、「E：教育」の目標として、「学習で身に付けたい力」を6項目、「SD：持続可能な開発」の目標として、「持続可能な開発について考え実践する力」を4項目掲げ、その評価をアンケートや振り返りの記述などで行っている。これらの評価から、成果としては、上述の取組により、生徒の資質・能力の向上が見られるとともに、行動変容にもつながっていることが挙げられる。課題としては、本取組自体の持続可能性であると思われる。ESDストーリーマップを基に、ブラッシュアップしながら継続していきたい。

わたしたちのふるさと『菊池』

—ふるさとを住み続けられるまちにしていこう—

橋本 歌織（熊本県：菊池市立隈府小学校）

I はじめに

本実践では、児童が地域のよさに改めて気づき、自ら進んで地域社会に関わろうとする態度を育てることをねらいとしている。6年生の児童は、2年間に渡り「防災・食料生産・菊池一族の歴史」の観点から菊池を見つめるふるさと学習を行った。わたしたちが住んでいる菊池は、地域の方の多くの思いや取組に支えられていることについて考え、自分たちも菊池のよさを伝えていきたいという自覚を持てるような実践を目指した。

II 実践の概要～第5学年・第6学年の2年間に渡る取組～

（1）災害から命を守るためにわたしたちにできること（第5学年）

災害について学び、作成した防災マップを地域へ届けた。防災士や消防士、市役所、自衛隊の方に話を聞く中で、防災マップ作りへの意識を高めた。町歩きでは、区長や公民館長の方に危険なところや安全対策が施されているところなどの助言をいただきながら回った。地域の方にも分かりやすいよう、危険な箇所や避難場所等を地図に描き込み、公民館へ届けた。

（2）これからの食料生産とわたしたち（第5学年）

菊池市の農業（米、水田ごぼう、メロン、しいたけ）を行う上での工夫や次世代へ残すための取組について調べ、ポスターを作った。それぞれの農家の方からの講話では、安心安全な作物を届けたい、おいしさを知ってほしいという思いを知ることができた。農家の方の思いが伝わるよう作成したポスターは菊池物産館に掲示していただき、お客さまにも見ていただいた。

（3）菊池一族「千本槍」について（第5・6学年）

本校は、毎年宮崎県の村所小学校と交流を行っている。交流会の中では、互いの地域のよさを伝え合っている。歴史グループの調べ学習では、菊池一族について菊池観光案内の方に話を聞き、「千本槍」について知った。菊池の伝統を発表したいという児童の思いのもと、千本槍踊りを教えてもらい、村所小へ発表することができた。

また、菊池神社の秋祭りの神幸行列として千本槍部隊で参加した。地元の方から大変喜ばれ、地域とのつながりを感じることができた。

III 考察

ふるさと学習をしていく中で、これまで知らなかった菊池のよさに気づき、そのよさを守り続けていくために自分たちにできることを考えていった。

今後は、さらに菊池を活性化していくために、学習したことをどのように発信していくか考え、系統立った実践を行っていきたい。

アドベンチャーワールドとの共同企画「おしごとそうだんセンター」 —地域のテーマパークで培うキャリア教育—

大浦 侑唄（和歌山県：白浜町立西富田小学校）

I はじめに

本実践は、国語科や生活科の単元をベースとして、キャリア教育の視点で学習活動を行う特質上、特別活動として位置付けている。地域の人と交流することを通して白浜町に愛着をもてるようにし、お仕事について幅広く触れることを通してこれからの仕事について考える素地を養うことをねらいとしている。

II 実践の概要

(1) 授業の流れ（全43時間、内特別活動は全7時間）

- 1 「おしごと」に対するイメージを挙げる。
- 2 「おしごと」について幅広く調査する。
- 3 「どうぶつ園のじゅうい」を通して、獣医師の仕事について学ぶ。
- 4 学校の先生たちにインタビューをし、学校の仕事について学ぶ。
- 5 町探検の計画を立てる。
- 6 町探検（アドベンチャーワールド）に行く。
- 7 調べたことをポスター形式でまとめる。
- 8 活動を振り返り、感じたことや考えたことを伝え合う。



町探検の様子（HPより）



児童の最終成果物

(2) アドベンチャーワールドとのチャット交流

国語科「どうぶつ園のじゅうい」の単元では、全10時間を4週に分けて実施、教員と園教育担当者がGoogle Chat機能を用いて、毎時間児童からの質問を獣医師に文章で回答してもらい、補足として動画や写真も共有してもらった。①説明文中での事例と近隣動物園での事例を比較することができ、②町探検へのワクワク感を高めることもできた。



図1 Google Chatでのやり取り

(3) 町探検の実施

自分たちの校区にある地域の企業である株式会社アワーズ（アドベンチャーワールド）を訪れ、そこで働く人たちにインタビューをしたり、獣医師のお仕事体験を行ったりした。パークにある様々な取り組みや役割を知り、命と向き合う仕事のやりがいや楽しさを、パークスタッフとの交流の中で感じ、人・動物・社会に目を向ける機会をつくることができた。



図2 インタビューの様子

III キャリア教育の視点から

児童たちは主に、①働く意義の広がり、②仕事に対する理解の深化を多く得られ、③協力することの良さを学ぶことがやや薄かったように感じた。

2025年大阪関西万博とSDGs —出展国各国のSDGsへの取組み—

宮川 洋一（2025年日本国際博覧会協会国際局）

I はじめに

(1) 万博の概要

- ・テーマ：「いのち輝く未来社会のデザイン」
 - ・サブテーマ：「いのちを救う」「いのちに力を与える」「いのちをつなぐ」
 - ・コンセプト：「未来社会の実験場」(People's Living Lab)
- 「万博」は世界中からたくさんの人やモノが集まるイベント
地球規模の様々な課題に取り組むための知恵を出し合い、未来社会を共創

(2) 万博とSDGs

- ・国連が掲げる「持続可能な開発目標」達成の目標年2030年まで残り5年
⇒2030年までに達成する為のプラットフォームとしてSDGs目標達成に貢献
- ・各国はテーマ説明書を作成、参加契約書の一部として提出
⇒その中の取り組むべき社会課題としてSDGs17の目標から選んで記載提示
- ・その解決への道筋を展示に反映

(3) 出展計画例（パプアニューギニアの場合）

- ・選択したサブテーマ：いのちに力を与える

取り組むべき社会課題

世界で3番目に大きい熱帯雨林を含めた自然環境保護（国土の75%）

⇒熱帯雨林の森林破壊は、種の絶滅、重要な生態系サービスと再生可能資源の喪失、炭素吸収源の減少を通じて、世界に影響を与える。しかし、この破壊は遅らせたり止めたりすることができる。

熱帯雨林を救うための5つの提案

- ・環境の重要性と、熱帯雨林を救うためにどのように貢献できるかの教育
- ・森林が伐採された土地に木を植えて、損傷した生態系を回復する
- ・環境に害を与えない方法で生活するよう人々に奨励する（自然と調和して暮らす）
- ・熱帯雨林と野生生物を保護するために公園を設立する
- ・環境へのダメージを最小限に抑える方法で事業を運営する企業を支援する。

未来へ続く小呂島 —持続可能な島とするためのESD—

力 恵利佳 （福岡県：福岡市立小呂小学校・小呂中学校）

I はじめに

本校は、玄界灘に浮かぶ周囲3.5km、人口約150人の小さな離島、小呂島に位置する施設設備一体型の小中併設校である。小呂島は、1645年、黒田藩の藩命による入植開始から約380年、豊富な水産資源を背景に漁業の島として、独自の文化を発展させてきた。平成20年頃まで、常に人口は200人程度を維持し、過疎に喘ぐ全国の有人離島の中でも稀有な存在であった。

しかし、近年、急激な気候変動等の影響を受け主要産業である漁業は不振を極めている。経済的にも厳しい状況が続く、島を離れる島民も急増し、人口は25%程減った。高齢化も加速し、最盛期に62名いた全校児童生徒は、現在12名。小呂島を有人島として存続させるため、様々な取組を試行錯誤しているところである。本校においても児童生徒を島の未来を支える主体となる人材に育成することが期待されており、その手段として全校でESDに取り組んでいるところである。

II 目指す児童生徒の姿と学習の流れ

本校の学校目標は「やさしさとたくましさをもち、自己や小呂島を誇りに思い、ともに学び未来を創り出す子ども」を育成することである。そのためには、児童生徒に小呂島について理解することが必要であると考え。小学校低学年では、生活科の単元において、地域にある公共施設に見学に行ったり、それらに携わる人にインタビューをしたりする。この学習を通して、自分が住んでいる小呂島に色々な場所やそれに関わる人がいることに気付かせる。小学校中学年では、総合的な学習の時間や社会科、国語科などの様々な教科と関連付けて、島の特産品や郷土料理など小呂島ならではのものについて調べ小呂島のよさや魅力に気付かせる。小学校高学年では、島の魅力を発信するために働く人の思いや願いを聞き、それを島外へ発信するための表現物を作成する活動を行う。中学生では、昨年度の課題から、自分たちができることを考え、観光客の増加を見越し、小呂島をきれいにする活動（島内SDGs活動）を行い、島民だけでなく、離島サミットにおいて全国の中学生に向けて発信する。これらの学習活動について、小学校1年生から中学校3年生までのカリキュラムマネジメント表作り、系統性をもたせた。

III 実践の中から ～今年度の取組～

令和6年度から「自ら問いを見出し、自分の考えを発信する子どもの育成」というテーマでの研究を開始した。今年度「ESDの視点を明確にした学習指導を通して」で、研究授業を行い、ESDを通して、郷土小呂島を誇りに思う気持ちを深め、その思いを行動に移すことのできる子どもの育成に努めているところである。

栄養教諭のESDへの軌跡 —給食を素材にチャレンジ—

橋本 智美（福岡県：福岡市立三宅小学校）

I はじめに

私は4年前、ESDティーチャープログラム福岡会場の案内版でESDと出逢った。学びへの好奇心から足を踏み入れたESDにすぐ魅了されたものの、授業実践の経験がごくわずかで授業案はもとより単元構想案など微塵も思い浮かばない。そんな栄養教諭が、授業を本業とする先生方とのプログラムを続けられたのは目の前の子どもたちを「持続可能な社会の担い手」に育みたいと精一杯考え、探究を続ける先生方ご自身がワクワクしておられ、輝いて見えたからである。その仲間として、私もESDに何とか取り組みたいと手探りで行って見た3年間のチャレンジをESDへの軌跡としてまとめてみたい。

II 給食を素材としたチャレンジ

栄養教諭がつくる授業の価値はどこにあるのかを問い続けた結果、「学校給食を素材とする」ことに辿り着いた。福岡市の学校給食は、市内統一献立であり綿密に年間計画が立てられており、毎月の献立に地産地消の食材を取り入れ、教科との関連にも配慮するなどESDの素材となる献立を提供していると考えられる。

そこで、学校生活の中で「実体験」できる場でもある給食を素材とした次の授業実践にチャレンジすることとした。

- (1) 「給食で真鯛を食べる」
- (2) 「捨てられていた部位を使ったギョロツケが給食に登場」
- (3) 「三宅小の給食とSDGsのつながりを探そう」
- (4) 「給食で地産地消を探そう」

○この題材で働かせるESDの視点（見方・考え方）

- ・有限性…食料はいつまでも当たり前にあるわけではないこと。
- ・相互性…食料生産やその輸送は環境問題と密接な関係があること。
- ・連携性…生産者も消費者も地球環境を考えることが大切であること。

III 今後のチャレンジ

今後も「給食」を切り口として、「持続可能な社会の担い手」を育む機会を子ども達に提供できるよう研鑽に努めたい。引き続き、他人ごとではなく、自分ごととして考えられる子どもを育てることに関わられるよう、栄養教諭として何ができるのかを問い続けたい。そして、自分たちの生活が、地球環境に影響を与えていることを意識させるような仕組みを産み出すためのチャレンジを続け、少しずつでもESDに迫ることを目指し頑張ります！

世界で一つだけの宝物づくり —地域を発見！地域教材を生かした保育活動へ—

中川 珠紀（滋賀県：草津市立玉川こども園）

I はじめに

本園のある玉川学区は、平安時代より歌に詠まれた諸国六玉川の一つで「萩の玉川」とも言われ、植物の萩を始め、遺跡などを地域が大切に保存している。一方で「学生の街」として南草津駅周辺を中心に開発されるなど、都市化され、京阪神に通勤可能なことから他府県からの転入、転出が多く、住民の入れ替わりが常にある。

本園はESDを進めるにあたり、「ふるさと」、「多文化理解」、「環境」、「栽培・食育」の4つを主な柱として取り組みを進めている。本実践は、その中の「ふるさと」に視点を当て、地域教材である「野路の赤土」を年間を通して保育の中に取り入れ活動することで、「地域特有のもの」という特別感が地域への愛着心を育み、将来的に地元へ貢献できる子どもの育成を行いたい。

II 取組の概要

(1)「野路の赤土」について知る。「鶴嘴を使わないと穴を掘ることができない程の堅い土」であり、「サツマイモを植えることしかできない」という赤土の特性や地域の人の赤土に対する思いを知る。



写真1：赤土を取る子ども

(2)赤土の特徴や特性を知るため、教材研究を行う。「何ができるか」

(3)チョコレートづくりや泥団子づくりなどの遊びを行う。

(4)子どもたちと一緒に地域の方の畑に赤土を取りに行く。素材集め。

(5)「赤土粘土づくり」を行い、物語の世界やイメージを広げて「赤土粘土」で遊ぶ。

(6)保護者と共に「世界で一つだけの宝物づくり（陶器づくり）」を行う。

滋賀県立陶芸の森から学芸員の方を始め、陶芸作家の方にもお越しいただき、指導していただくなど、園、保護者、地域、関係機関が連携・協働した活動となった。

III 実践を通して

地域に出かけ、材料になる赤土を取り、自分たちで粘土づくりを一から行ったことが、子どもたちの興味を掻き立て、赤土を身近に感じながら、夢中になって遊ぶきっかけになった。また、粘土の材料となる赤土が、自分たちの住む地域「野路特有のもの」ということを知ったことは、驚きと共に地域の新たな発見へと繋がった。更に赤土を使い陶器づくりを行うなど、子どもの生活と結び付け、年間を通して保育に取り入れた。こうした一連の活動をとおして、そこに関わる様々な人や思いに触れ、こうした体験が子どもたちの感性の育みになった。また、地域の人や保護者は、赤土を取り入れた保育における活動のねらいや教育的価値を知り、地域の人が赤土に対する見方の変容と保護者の地域の発見や親しみ、本園の教育活動の理解推進を図ることができた。

ふるさと学習「高野口の歴史」～歴史から学び 未来を描く～ 一わが町高野口魅力UP（地域活性化）プロジェクト～

岡本 崇史（和歌山県：橋本市立高野口小学校）

I 学校紹介

高野口小学校は、和歌山県橋本市高野口町にある公立小学校です。校舎は木造平屋建て、昭和12年（1937年）に建てられました。南北に続く89mの長い廊下や屋根瓦、校舎周りを囲んでいる石垣などは本校の特色の一つです。また、高い天井の廊下には、温かい光を放つ電球がぶら下がっており、長い歴史と木のぬくもりを感じることができます。さらには、災害に強い建築構造にもなっており、児童は安心して毎日の学校生活を送っています。

平成26年（2014年）には国の重要文化財に指定され、児童や学校職員だけでなく、地域住民にも愛され続けています。また、平成27年（2015年）には、ユネスコスクールにも加盟し、本校の歴史的価値を伝え続ける活動を行っています。今後も引き続き、SDGs 11「住み続けられるまちづくりを」を目指して、地域と共にある学校づくりに努めていきたいと考えています。

本校では、学校教育目標「未来を創る子どもの育成」を掲げ、最上位目標「自分で考え判断し、行動できる力（主体性）」を身に付けさせることを共通認識のもと全職員で指導にあたっています。また、ESDの理念に基づいた教育活動を展開するため、毎年年度初めにカリキュラムマネジメントを行い、持続可能な社会の創り手を育てることに力を入れています。さらには、「ふるさの高野口を愛し、地域に貢献できる子どもの育成」を目指して、全校を挙げてふるさと学習にも積極的に取り組んでいます。（1・2年生は生活科、3～6年生は総合的な学習の時間を中心に）

II ESDやSDGsの視点を取り入れた教育実践

（1）ESDカレンダー（橋本市共通）を活用し、1年間の見通しをもつ

年度当初に全教職員で計画したESDカレンダーを土台として、児童の興味関心に応じたカリキュラムマネジメントを行うように心がけてきた。児童の探究学習を支援する立場（伴走者）としての役割を大切にしている。

（2）地域人材を生かしたふるさと学習の充実

地域人材を生かしたふるさと学習を積極的に進めている。学校長やCS推進委員を中心としたネットワークを生かして教育活動にあたっている。

（3）他地域との連携

ユネスコスクール（和歌山県立橋本高等学校・古佐田丘中学校）や校舎が重要文化財指定校（愛媛県八幡浜市立日土小学校）同士の交流会も行き、歴史的価値を未来へつないでいくことを意識した教育活動も展開してきた。

III 今後の展望

今後も子ども「主語」にした教育実践に努め、子どもたちが社会貢献活動を通して自己有用感を感じられるよう、支援していきたいと考えています。

外国語の授業で行うESD

—地球に暮らす動物たちと共に生きるために—

高橋 百合香（鹿児島県：屋久島町立小瀬田小学校 外国語専科）

I はじめに

本実践は、小学校6年生の外国語の授業の中だけでできるESDとして、教科書の単元から自分たちの住む島の動物に思いをはせ、環境問題を考える展開を試みた。英語専科として4つの学校を兼務し、一日2校を周りながら授業をしている立場を生かし、他校間交流や、観光客が立ち寄る施設を利用して、外国人観光客に向けて発表するという活動を行うことにした。

II 取組の概要

つながりを大切にした学びの構想

① 屋久島型ESD・キャリア教育の構想

屋久島町では、「屋久島型ESD・屋久島型キャリア教育全体構想～未来の屋久島を担う人づくり～」という教育ガイドラインがある。幼児教育から高等教育に至るまでに、「屋久島の」何を学ぶかを明確にしている。小学6年生は、地域のために「屋久島の良さを伝える・自分ができることを考える」とある。

② 他校間をオンラインで繋ぎ、発表を見せ合うことで、普段関わることの少ないお友達の考えを知り、新たな発見が学びを深めた。

③ 各学年の総合の時間において、屋久島の自然と文化について詳しい地域人材を活用してきている。そこで学んだことを外国語の授業でも生かせる展開とした。また、今回はアメリカ人のESDアドバイザーとニュージーランド人のALTの協力を得て、授業の中で母国の環境問題について説明してもらうなど、子ども達にとって刺激の多い授業展開となった。

④ 教科書には地球規模の環境問題が、シンプルかつ幅広く紹介されている。英語で書いたり読んだりするため、簡単な表現にはなるが、調べて分かったことを通し、“Think globally, Act Locally.”世界的な視野で考えて、屋久島で自分たちができることを考え、それを伝える簡単な英語表現を作り発表した。

III 考察

屋久島は、固有種の動植物も多く、絶滅危惧種の海ガメの産卵や孵化を観察できる。電気は水力発電でまかなわれ、山岳ガイドが沢山いるなど、ESD的要素が満載だ。そんな島の小学生だが、コンビニもない僻地で遊ぶ場所も少ないため、この島が恵まれていることに気付いていない子どもも多い。「ふるさとを誇りに思い、自分達でできることを考え行動してゆく」ためのESD教育を続けたい。

【ESD 講演会】 1月12日(日)15:45~17:00

「学び、究め、創り出す力を育む ― 持続可能な世界を築くために」

講師:国立大学法人奈良国立大学機構 理事長 榊 裕之

わたしは日浦の観光大使！

—未来へつなげよう！日浦の豊かな恵み—

西河 珠美（愛媛県：松山市立日浦小学校）

I はじめに

本校が位置する日浦地区は、松山市の北東部、石手川ダムのさらに上流にあり、緑豊かな山林に囲まれている。松山市内全域から児童を受け入れており、子どもたちにとっては、ここが第二のふるさとである。この実践では、自然豊かな日浦地区を学びのフィールドとして、積極的に地域に出かけ、児童自身が、気づき、考え、自分に何ができるか自分事として考え、行動できることをねらいとしている。

II 実践の概要

- (1) 収穫体験（稲刈り、ほうれん草収穫）
 - ・ 米農家さんの誇り、丁寧な仕事ぶり、生産者としての思いを知る。
 - ・ ほうれん草農家さんから、収穫のコツや農作物への愛情を聞く。
- (2) SDG s コンダクターさんとの学び
 - ・ レクリエーション・SDG s 基礎知識を学ぶ。
 - ・ おいしいお米の炊き方を実習を通して学ぶ。
 - ・ 食品ロス、世界食糧問題等について考える。
 - ・ SDG s 宣言をする。
- (3) こども屋台選手権【令和5年10月28日（土）開催】への参加
 - ・ メニューの特徴を考える。
 - ・ 目をひく看板製作を行う。
 - ・ 集客のためにチラシを添えて手紙を書き、宣伝する。
 - ・ チームの一体感を生むエプロン製作
 - ・ 接客ポイントを確認、実践する。
- (4) 振り返り
 - ・ お礼状を書く



提案したメニュー「ルーローハン」

III 成果と課題

- 米農家の方から「みんなにもっとお米を食べて欲しい」と聞き、自分の消費行動が、生産者の方を応援することにつながることを知った。
- 良いものであったら必ずしも消費者が手にしてくれるとも限らない。流通の実際を体験し、食の安心・安全・価格・栄養価・料理の提案など、より魅力的な情報発信についても考えることができた。
- 屋台選手権に参加し、日浦の食材をアピールしたことで、たくさんの方から声を掛けていただき、行動をおこすことの楽しさを知った。
- 食問題や地産地消への思いは高まったが、実際の消費行動につながるまでには、時間がかかるものと考えている。継続的な地域の方との関わりを通して、自分事として物事を捉えられる児童に育って欲しい。

協働しながら，達成感を味わうことのできる児童の育成 —探究心を育み，課題解決能力の育成を図る広木小探究学習—

横山 邦昭（鹿児島県：鹿児島市立広木小学校）

I はじめに

予測不能な様々な事象に対応できる子供たちを育成するために，物事を自分事として捉え，自ら問いを立てて情報を集め，考え，行動する課題追究サイクルを自ら回していく必要がある。変化が激しい予測困難な社会に対応し，自分らしい生き方を選択して幸せに生きていくために「探究」する力を子供時代から身に付けさせていくことは，これからの社会に対峙していく子供たちに対しての私たち教師の責務であると考えている。

II 実践概要

個人探究と学年探究「ひろたん」の取組

本校では総合的な学習の時間に行う探究学習を「ひろたん」とし，その学習を個人での活動と学年での活動に分けて行っている。

(1) 個人探究

自分自身の身近な場面での「なぜ?」「どうして?」「もっと知りたい」を課題に設定して，探究活動を進める。

【主な活動（計画）】 ※第3回までは一斉学習

6月（第1回目）：オリエンテーション「探究的な学習」とは

7月（第2回目）：個人の課題，テーマについて

（第3回目）：グループ編成

7～10月：探究課題設定

情報収集を行い，追い求めたいことを具体化する。

11～12月：情報収集（観察，実験，見学，調査，探索 等）

1月：整理・分析，まとめ

2月：発表

(2) 学年探究（次年度に向けて）

学年で設定した『人・もの・こと』から「なぜ?」「どうして?」「もっと知りたい」を課題に設定して，探究活動を進める。

① 系統を踏まえた題材の設定

② 個人探究と学年探究の年間スケジュールの計画



写真1 ランドセルの旅立ち

これまでの実践例 6年「ランドセルは第2の人生へ」

小学校卒業後，ランドセルは不要となる。「“不要⇒ゴミ”なのか?」の問いをもち，家族と相談しながら，ランドセルの第2の人生について考え，活動がスタートする。これまで兄姉が『ランドセルは海をこえて』の活動に取り組んでいるため，この活動に意欲的に児童は取り組む。「関東圏までの輸送費はどうすればよいか」「自分たちだけでできるだろうか」等の問いをもちながら6年生最後の探究活動として取り組んでいる。

海に親しみふるさとにほこりと愛着を持つ児童の育成 —課題意識をもち対話を通して探究する児童—

倉見 倫代（石川県：能登町立小木小学校）

I はじめに

能登町立小木小学校は、能登半島の先端に近い能登町に立地している。校区である小木地区は、豊かで多様な生物が生息する海岸線、特色ある水産業、海に関連する歴史や文化、能登里海教育研究所をはじめいくつかの研究施設等を有している。また日本海側有数の漁業基地・イカの水揚げ量が日本海側で一番多い「イカの町」であり、海洋関係の地域行事も多く、海に関連する施設等が集まっている。

II 実践の概要

(1) 海洋教育について

海に関する体験活動や地域行事への積極的な参加を教育活動に組み入れることで、ふるさと小木への誇りと愛着を育むと考え、文部科学省に特例申請し設置された「里海科」を中心に、生活科や総合的な学習の時間に、「海に親しむ」「海を知る」「海を守る」「海を利用する」の4分野を段階的に実践している。

(2) 教育実践

①里海科「海洋ごみの環境への影響について」

中学生とともに海岸清掃と、海洋ごみの環境への影響について学び、身近にある海の様子を知り、海の環境を守るために自分のできることを考えた。

②総合「能登町の魅力を発信しよう」

能登高校3年生が行っている、市場に出回らない未利用の魚を活用する取組について教えてもらい、高校生の目をつけている視点を参考に、能登町の魅力を発信できる給食の献立を考えた。

③理科「変わり続ける大地」

4メートル隆起した黒島海岸へ行き、能登里海教育研究所の方から、隆起についての説明を受け、土地は地震によって変化することを学習した。

III 成果と課題

(1) 成果

- ①児童が課題意識をもったことで、進んで対話し、学習が深まった。
- ②能登半島地震を生かし、地域の学習素材の開発ができた。
- ③高学年になると、「ふるさとが好き」から「地域貢献したい」という気持ちに高まった。

(2) 課題

- ①自分たちの学びを「発信したい」と思えるしかけを入れること。
- ②海洋教育の各学年の学びが、単年度で途切れているので、つながりを意識した活動にすること。

児童と私が共に育つことができた「ハンセン病問題学習」

— 当事者との出会いを通して —

中川 純一（奈良県：生駒市立俵口小学校）

I はじめに

本実践は、前任校である桜井市立大福小学校の5年生での取組である。当時は、ESDとの出会いはなく個別的の人権課題の取組として進めてきた。そこで、現在はESDについて学ぶ機会を頂いたことで、本実践を通してESDとの関連を考察し、発表したいと考える。

大福小校区の町は、家族世帯向けの住宅街が並ぶ一方、県営住宅や市営住宅があり生活困窮者が一定数在籍している。しかし、人と人とのつながりがあり、非常に温かい地域でもある。障がいをもった利用者の社会貢献を目ざした「メイクるタウン」は、お惣菜を販売することを通して地域のコミュニティを形成したり、移動が不便な高齢者に向けた配達サービスを行ったりしている。

このような、温かい人と人とのつながりを感じる校区に住む児童だからこそ、コロナ禍により希薄になったつながりを、「ハンセン病問題学習」で学ぶ必要性を感じた。

II 実践の概要

(1)土台となる「なかま集団づくり」

- ・学級通信とふりかえり
- ・個別的な人権課題の取組

(2)「ハンセン病問題学習」について

- ・取組をするにあたってこだわったこと
- ・取組の流れ ～ハンセン病回復者の中尾伸治さんとの出会い～
- ・一つのつながりを大切にすること

(3)本実践とESDとの関連

- ・「ハンセン病問題学習」とESDについて

III 成果と課題、感じたこと

・成果

子どもたちが日々のくらしを見つめ直し、行動の変容が見られた。また、教員自身の中にあつた無自覚による「決めつけ」に気づくことができた。

・課題

本実践では、「ハンセン病問題」を風化させず、伝承すること念頭において取組を進めることができなかった。

・感じたこと

学年部集団でチームとして取り組めたことが本当に良かった。児童の価値観や行動の変容を促す取組を進めるためには、まず教員たち自身のつながりを大切にすることが必要ではないかと考える。

SDGs×アントレプレナーシップ教育のESDの実践

— 生徒一人ひとりの「やってみたい」が叶う場所「SDGs研究会」 —

瀧村 尚也（千葉県：麗澤中学・高等学校）

I はじめに

今回紹介するのは、探究学習の一つとしてアントレプレナーシップ教育を行っているSDGs研究会という部活動だ。活動のきっかけは、一冊の英語の教科書である。当時中学三年生だった一人の生徒が、英語の教科書に載っていた小児がんを患ったアメリカの少女が、レモネードスタンドを行う内容に衝撃を受け、2018年に実際に学校でもレモネードスタンドを始める。1人から始まったこの活動は、仲間を増やし、徐々に活動を広げてく。しかし、活動を始めた生徒が、口に出した言葉は意外なものであった。

『どうにか、募金していただいたお金の全額寄付ができないのだろうか。』

活動の際、原料や装飾費用がどうしてもかかってしまい、募金していただいたお金から差し引いて寄付を行っていた。この生徒の発想がフェアトレードコーヒーの活動を始めるきっかけとなり、全額募金と持続可能な活動を実現させた。

II 活動の特徴

現在は中高合わせて70名が所属しており、学校から資金援助を受けず、自分たちで活動資金を生み出して、持続可能なビジネスモデルで運用をしている。実社会と同じく実際に現金で仕入れをし、商品・サービス等を販売するという一連の事業活動を体験することで「起業家精神（アントレプレナーシップ）」の涵養を図ることが可能となっている。また、会社のように経理部やシステム開発部などの部署を設置し、役割を明確化することで、すべて生徒主体の活動になっている。活動は生徒たちが企画を立案し、その内容に賛同した生徒とプロジェクトを実行している。具体的には、フェアトレードコーヒー企画をはじめ、レモネードスタンド企画、SDGs啓発企画など8個の企画が同時に進行している。

部活動のため、横のつながりだけでなく、縦のつながりも生まれ、活動の経験やノウハウだけでなく、想いも継承されていくため、活動を継続的に行うことが可能となっている。



SDGs研究会「EARTH」の部員たち

III 今後の展望

現在は、人や場所やお金がなくても「やってみたい」という思いがあれば、誰でもできるということを証明し、継続的に活動を行うことができる体制をつくることに力を入れており、必要な情報や備品を無償提供し、活動のフランチャイズ化に取り組んでいる。現在は首都圏のみとなるが、この規模をさらに広げ、日本全国の学校へ拡大する。

エネルギー・環境問題を自分事に —ESD実践 白浜町の温泉と持続可能な社会—

平野 俊（和歌山県：白浜町立白浜中学校）

I はじめに

和歌山県西牟婁郡白浜町の温泉は日本三古湯の1つである。そのため、白浜町は観光のまちとして古くから形成されてきた。観光協会の調査では、8割が温泉を目当てに観光に来ている（他理由と重複は含む）とある。しかし、一方で町に住んでいる子どもたちの温泉への理解は乏しく、関心も薄い。

生徒たちは10月末にエネルギーの単元を学び、資源の有限性やエネルギーの有効活用方法について学んでいる。本単元は地域教材である「温泉」を取り上げ、エネルギーや環境について自分事化することを狙ったものである。協働学習にて考えを深め、単元の最後では白浜町と温泉の持続のために何ができるか行動案を示させた。行動案の内容より価値変容を見取り、今後の行動変容を観察する。



II 取り組みの概要【かっこは協働学習のツールを利用】

第一時 白浜町のくらしと温泉

- ・世界の数値データと比較する。
- ・【ウェビング】にてくらしと温泉について考えを広げる。

第二時 白浜町の資源の課題は

- ・【問いづくり】の手法にて疑問をだす。課題を見出す。

第三時 地域の専門家に話を聞く

- ・温泉の専門家に講演をしていただき、フィールドワークを行う。

第四時 世界の温泉を調査する

- ・白浜町の歴史を調べる。日本・世界の他の温泉を調べ比較する。
- ・【時間軸・空間軸に広げチャートにまとめ共有する。】

第五時 白浜町・温泉の持続のために行動案を掲げる。

- ・【ディスカッション】にて他者の行動案・意見を聞く。
- ・他者の意見により改善した行動案を掲げる。

III 成果と課題

(1) 成果

- ・アンケートにて6割超が温泉への知識、関心がないと答える中、ワークシートの内容から資源「温泉」についてよく考えたことが分かる。
- ・地域教材の利用により生徒の主体性が高まり、深い深びとなった。

(2) 課題

- ・実際の行動まで取り扱っておらず、行動変容を見取ることはできない。
- ・教科横断的にとらえて効果を高め、実際の行動に移させたい。

春日山原始林は二酸化炭素をどれだけ吸収するのか —総合的な学習の時間で行う環境学習—

堤 彦三郎・山本 浩大（奈良教育大学附属中学校）

I はじめに

2023年、世界的な平均気温の上昇により、グテーレス国連事務総長は「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が到来した」と警鐘を鳴らした。温暖化への対策は喫緊の課題である。生徒たちは、“森林は二酸化炭素を吸収し、酸素を生み出す”という知識はあっても、実際にどれだけ量が吸収され、生み出されているのか、数値として知っている生徒は少ないと予想される。

そこで、本実践では、奈良教育大学附属中学校に通う生徒たちにとって身近にある、春日山原始林を題材とし、実際にどれだけ二酸化炭素を吸収しているか、数値として明らかにし、さらに自分の暮らす地域ではどうだろうかと自分ごと化し、温暖化への意識づけと、どのように行動したら良いか考える契機としたい。また、調査に際しては数学科と理科の教科横断的な学習も行い、実践する予定である。

II 実施計画

学習活動	主なねらい・学び	ESDで育てたい資質能力(主なもの)
はじめに	・春日山原始林，地球温暖化について知る。	多面的，総合的に考える力
地球温暖化と春日山原始林	・調べ学習を通して，地球温暖化に関心を持つ。 ・春日山原始林と地球温暖化に関する調査を他者に伝える力や発信する力を養う。	他者と協力する態度
標本調査の妥当性	・実際に現地調査を行う前に，どれだけを広さを調べると良いか，どのような調査方法が良いかを検討する。	批判的に考える力
森林の植物について学ぶ	・奈良の森林で多い植物について調べる。 ・植物の二酸化炭素固定量と光合成・呼吸の関係について学ぶ	多面的，総合的に考える力
春日山原始林散策	・春日山原始林に実際に赴き，現地調査を行い，インターネットや書籍等の調査内容の差異を検討する。	つながりを尊重する態度
まとめ	・調査内容をまとめ，事前学習で予想していたこととの差異とその原因，今後どのように行動していくべきか考え提案する。	未来像を予測して計画を立てる力
発表に向けてのPPT作り	・学習内容を他者に伝える力や発信する力を養う。	多面的，総合的に考える力
発表会	・学習内容をまとめ，発信する力を養う。	他者と協力する態度

III 実施にむけての留意事項

活動するなかで、生徒たちは多くの疑問を持つと予想される。その生徒が感じた疑問を尊重し、地球温暖化に対して、自分や家族、学校、社会でできることを生徒たちが自分で考え、検討し、社会や企業にむけ提案できるようサポートしたい。

ユネスコクラブのESD活動 2024

—大学生が伝える奈良のESD—

吉岡 優来（奈良教育大学ユネスコクラブ）

I はじめに

奈良教育大学ユネスコクラブは「ESDを実践できる教員になること」「ESDを楽しく追究すること」を目的とし、様々なESD活動を行っているサークルである。2024年度の主な活動は、子ども支援・地域イベントへの参加・他大学のユネスコクラブや次世代ユネスコ国内委員会をはじめとする他団体との連携などがあげられる。また、ユネスコスクール全国大会への参加や、実践の発表、ポスターセッションをする機会も多くいただくなど、活動の幅を広げている。

II 実践事例の概要

(1) 都跡中学校校外学習の事前学習「奈良の鹿との共生」

5月30日（木）奈良市中部公民館にて、都跡中学校の校外学習の事前学習を行った。対象は都跡中学校1年生で鹿の角細工、ならまち散策に校外学習に行く前の学習として大学生が講義を行った。「どうして奈良の鹿は逃げないのか」という問いをテーマに、奈良の鹿と人々の関わりの歴史を知り、現在ではどんな工夫で奈良の鹿と生活をしているのか予想した。動物との共生の工夫や、地域の人々の暮らしの様子など、校外学習で「見る」視点を広げるような支援ができた。

(2) 平城京跡アオハルプロジェクト「おぎの美術館」への参画

8月～10月にわたり、平城京跡で開催する「おぎの美術館」のプロジェクトに取り組む、奈良女子大学住環境学科の学生と連携し、活動を進めた。「おぎの美術館」とは、平城宮跡に広がるおぎの群生地外来種のセイタカアワダチソウが浸食している課題を解決するため、群生地を整備し、木のフレームやベンチを設置することで自然とアートの共生を目指したものである。

活動内容は、奈良市伏見小学校の6年生に向けた出前授業と、「おぎの美術館」の開催に向けた作業の2つである。出前授業では、模擬ゲームなどを通して、外来種の及ぼす影響や生物多様性の必要性について説明し、自然の保全をするためにすべきことを一緒に考えた。その後、奈良女子大学の学生から自然の保存に向けた活動として「おぎの美術館」の説明をした。「おぎの美術館」の開催に向けた作業では、児童達と共に、おぎ束作りや、セイタカアワダチソウの間引きなどを行った。児童たちは授業も作業も意欲的に行っており、生物多様性など課題を知り、そのために自分たちも行動することで「自分事化」として考えることができる活動になった。

III 終わりに

今年の活動では、大学生ならではの近い距離で子どもたちと接し、一緒に考え学ぶことができた。今後は、学生自身の知見を広めつつ、子どもたちが身近な地域から地球の持続可能性について、より自分事として考えることができるような支援や活動を行っていきたい。

知行合一

—大塩平八郎の乱から学ぶ—

三笠 日向（大阪府：大阪市立新森小路小学校）

I はじめに

本校は第6学年社会科「明治の新しい国づくり」の単元において、取り上げられている大塩平八郎に着眼点を置く。大塩平八郎が起こした大塩平八郎の乱では人々の生活に苦しむ人々のために大商人の屋敷などに攻め入った。そんな大塩平八郎に賛同したものの中に子どもたちの祖先である人々も参加している。そのことから命を懸けてまで乱へ参加した理由を踏まえて、今の私たちにはどのような行動ができるかを考えることで自分事として意欲を持った活動を取り組みを行うことにした。

II 指導について

「見つめる」では、大塩平八郎の乱について自分たちの地元とのつながりに気づくことを起点とする。児童は今住んでいる地域の祖先が「乱」に参加していたことについてほとんど知らないため、その事実が大きく驚いていた。そして、その一方で彼らの処刑されることとなる事実から「どうしてそこまでして私たちの祖先は乱に参加したのだろうか」という学習問題を設定した。

「調べる」では、「大塩平八郎の乱」が一体どんなものだったのか、大塩平八郎がどんな人物であったのかを調べた。図書室や地域図書館の資料、インターネットを活用して確かめた。さらに、その中でより詳しく出てきた疑問については、大塩事件研究会の会長（兵庫県立歴史博物館の館長）をされている藪田氏を招き、自分たちの祖先がどのように考えを持ち参加していたのか、考えを深めた。その中で大塩平八郎が座右の銘としていた、「知行合一（ちこうごういつ）」について本当の知は実践を伴わなければならないという言葉に一人ひとりが心打たれた様子だった。

「深める」では、調べたことをもとに、自分たちの祖先の思いについて考えた。そして考えたことを藪田様に手紙形式で送り、評価をいただいた。

「広める」段階では、大塩平八郎と地域とのつながりを踏まえて地域が抱える課題とともに大塩平八郎について知ってもらおうポスターを作成し、地域の病院やお店などに掲示していただく予定である。（3学期に実施予定である。）



図1 出前授業の様子

III 実践を終えて

子どもたちの住んでいる地域の祖先が参加したことから、大塩平八郎とのつながりを強く感じ、興味を持つ児童が多くみられた。また、知行合一という言葉から自分たちも学んでいることを行動として発信していく必要性を強く感じるようになっていた。

東大寺寺子屋における取り組み

—世界遺産のお寺で気づく、学ぶ、考える—

鷺尾 隆元・平岡 慎紹（華嚴宗大本山東大寺）

I はじめに

東大寺では、奈良県在住の子供達を対象に、平成26年より「東大寺寺子屋」を開催している。1300年以上の歴史と文化をもつ奈良において、私達は非常に恵まれた環境に身を置いているが、過去の歴史を鑑みた時先達の方々は何を伝えようとしてきたか。それについて東大寺の僧侶が、数日間東大寺の敷地内で寝食を共にし、子供達に気づき、学び、そして自ら考える力を獲得出来るよう、各有縁者や奈良教育大学の学生と共に学習する取り組みを行っている。

II 取り組みの概要

(1) 東大寺境内での活動

1泊2日ないし2泊3日の期間、東大寺境内にて子供達が東大寺若手僧侶と寝食を共にしながら活動をするのが本行事の大きな特徴である。近年では、境内フィールドワーク（諸堂参拝）、大仏殿夜間拝観、經典の読誦、精進料理の食生活など、東大寺僧侶が普段行う活動の実体験が挙げられる。それらを適宜班毎に話し合いを行い、最終的に各自の気づき、学びを一文字で表現し、保護者へ発表する。またその結果を東大寺の僧侶が講評する形となる。

(2) 奈良の有縁者との連携

東大寺僧侶だけではなく、奈良教育大学ESDティーチャープログラム登録学生をはじめ、現役教師、奈良地域デザイン研究所、読売新聞わいず倶楽部会員、東大寺職員等による幅広い世代、多職種による連携で充実した取り組みを目指している。

III 今後の展開について

2024年で第10回を数えた当行事であるが、コロナ禍のリモート開催を含め、活動内容には毎回試行錯誤を重ねてきた。開催前には関係者による熱心な討論の元、その時々で最善と思われる取り組みを行ってきた。

原点にあるのは未来を担う子供達への期待であり、それは1200年以上前に東大寺を建立した聖武天皇の想い、華嚴の教えに通じるものである。

今後もその想いをこの活動を通じて子供達へ伝えていくと共に、子供達だけではなく、関わった全ての人々にとっても同様に気づき、学び、考えるきっかけを与える行事となるよう、引き続き東大寺の主要な行事の一環として取り組んでいきたい。

「地球にやさしい、かしこい消費者」を目指そう！

—E S Dの視点に立った家庭科の授業実践を通して—

村上 千砂子（熊本県：菊池市立花房小学校）

I はじめに

5年生の児童は、総合的な学習の時間「地球環境プロジェクト」において、環境問題について学習する。地球温暖化や大気汚染などの環境問題について調べ学習を行ったり、講話を聞いたりして、児童も世界の現状をよく理解していた。さらに、環境問題を自分のこととして捉え、生活の中で自分たちにできることを実践していけるようになってほしいと思い、E S Dの視点に立った家庭科の学習を行うことにした。

II 実践の概要

（1）単元「持続可能な社会へ 物やお金の使い方」における実践

- ・自分や家族が買い物をするとき・物を使うときに、どのように環境や資源に配慮しているのか生活を振り返り、環境にやさしい方法で選んだり、使ったりすることができるようになる。

（2）単元「物を生かして住みやすく」における実践

- ・引き出しを片付けたり、環境にやさしい方法で掃除したりすることで、物を大切に使い、管理していくことに気づかせた。

（3）総合的な学習の時間「地球環境プロジェクト」と関連させた取組

- ・学習してきたことを、花房フェスタで他学年や保護者、地域の方に向けて発表した。
- ・子どもたちが田植えをし、稲刈りした米をマリ共和国へ支援米として送った。

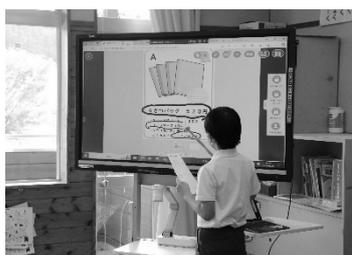


写真1：視点をもとに商品を選ぶ活動



写真2：物を活用し掃除をする児童



写真3：花房フェスタでの発表

III 考察

総合的な学習の時間と関連させながら家庭科で実践したことにより、普段の生活でも「ノートは1冊だけ買いました」「すぐ食べるから期限が近いものを買いました」と、学んだことを家庭でも取り組んだ発言があった。また社会科でも生産者の立場から環境問題につなげて、持続可能な生産について考える姿も見られた。今回は環境問題に特化した実践であるが、E S Dの視点を日々の学習や生活、花房小の伝統や活動ともつなげていきたい。

吉川 浩 (ビーフォレストクラブ)

Bee EcoArt

自然と芸術の融合

ハチ宿アート作品は、芸術性と機能性を融合させた「生きたアート作品」です。花バチなどの訪花昆虫の住処として地域の生態系を支え、自然環境の保全や改善に貢献します。

21世紀のエコロジー

Bee EcoArt is the ecology of the 21st century



Hachi-yado ART

ハチ宿アート

The Fusion of Nature and Art

私は、虫はキライです
でも、昆虫は増やしたいです

I hate insects.
But I would like to increase
the number of wild bees.

Insect house

ハチ宿アート展
Bee-ecoArt august 2023 in Nara



・「花バチ」とは、花を訪れて受粉するハチです。花の蜜と花粉をもらって生きています。日本ミツバチはじめ、日本には約400種の野生の花バチがいます。
・「ハチ宿」とは、筒状の穴に産卵する花バチのために作った人工の産卵場所や棲家です。



Bee Forest

できること、始めましょう！

"No bees, no future.
The future is in our hands."

Let it Bee!

野生のハチは、地球上の80%以上の植物種の受粉を担い、生態系のバランスを保つ上で重要な存在です。特に「花バチ」がいなくなると、植物は繁殖できず、生態系が崩れてしまいます。

ビーフォレスト・クラブは、「花バチを増やそう、ハチ宿をつくろう！」という活動を通じて、花バチの保護と回復に取り組み、食料供給と自然環境の健全性に大きく貢献しています。

ハチ宿アートやビーフォレスト活動
パートナーシップ、環境教育、連携活動など
お問い合わせは、→



2024年度 近畿ESDコンソーシアム
成果発表会・実践交流会

2025年1月12日発行

近畿ESDコンソーシアム
奈良教育大学 ESD・SDGs センター
〒630-8528 奈良市高畑町

